「総合的な学習の時間」における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

星　　克*

令和３年答申では，目指すべき新しい時代の学校教育の姿として「全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと，協働的な学びの実現」が提言された。その中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」は相対するものではなく，互いに相関関係にあり，一体となって充実を図ることが出来ると説明している。本校の総合的な学習の時間は，実社会の中から解決したいテーマを見いだし，そのテーマに一年間繰り返し関わり続けるという特色がある。個人の課題意識や解決方法を持ち寄り，協働的によりよい解決を目指す本校の総合的な学習の時間における学びは，社会に開かれた教育課程づくりを実現する上でも有意義であると考える。

〔キーワード〕総合的な学習の時間　個別最適な学び　協働的な学び　探究　社会に開かれた教育課程　地域資源

はじめに

近年，生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や，絶え間ない技術革新等により，社会構造や子どもたちを取り巻く環境は急速に変化し続けている。学習指導要領の改訂に関する「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28（2016）年12月21日中央教育審議会）においても，社会の変化が加速度を増し，複雑で予測困難となってきていることが指摘されたが，近年の新型コロナウィルス感染拡大により，その指摘が現実のものとなった。

このように急激に変化する社会の中で，子どもたちは未知なる課題に対し，多種多様な人々と協働しながらよりよい解決方法を考え，一人一人が未知の課題に対し，自身の経験や知識を生かして主体的に解決しようとする態度を養うことが求められている。

総合的な学習の時間は，探究的な見方・考え方を働かせ，教科等横断的・探究的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決することを目標としていることから，これからの時代においてますます重要な役割を果たすと言える。

このような状況を踏まえ，中央教育審議会では「教育課程部会における審議のまとめ」（令和３年１月25日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会），「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」（令和３年１月26日中央教育審議会）が取りまとめられた。その中で，カリキュラム・マネジメントの取組を一層進めながら，新たに学校における基盤的なツールとなるICTも最大限活用し，多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく資質・能力を育成する「個別最適な学び」と，子どもたちの多様な個性を最大限に生かし合う「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められている。また，新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」を目指し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。

１　実践の意図

そこで本論では，2022年度の福島大学附属小学校３学年の総合的な学習の時間の実践について述べる。本単元では，実社会の中から問いを見いだし，自分で課題を立て，情報を集め，整理・分析すること，また，互いのよさを生かしながら，主体的に問題の解決に取り組む態度を養うことをねらいとした。また，本単元では「飯坂温泉の活性化」という大きな枠組みの中で，友だちや観光協会，商店街の人々といった多様な他者と関わりながら，よりよい課題解決を目指す「協同的な学び」と，個人が興味･関心をもって繰り返し関わった商店や旅館に焦点化し，個別によさやこだわりを調査し，発信方法を考える「個別最適な学び」とを往還しながら学習を進めていく。そうすることで，個人の課題意識に基づく情報収集と，収集した情報を持ち寄り，より飯坂温泉全体を活性化させたいという集団の課題意識の両方を解決することが出来るようにし，「協同的な学び」と「個別最適な学び」とが一体となって充実していくことをねらいとした。

２　実践の概要

２－１　未知なる課題（協働テーマ）との出合い

子どもたちが主体的に未知なる課題の解決に取り組むことが出来るよう，実生活の中からから，より実感

＊　福島大学附属小学校

を伴って感じることが出来るような課題を模索した。子どもたちに地域への課題意識について調査すると，東日本大震災や，昨今の新型コロナウィルスの感染拡大に伴う観光業界の衰退について関心を寄せる子どもが多くいることが分かった。そこで，登下校でも本校児童が多く利用する福島交通飯坂電車の輸送人員の変遷のデータを入手し，子どもたちへ提示した。

年度	輸送人員（万人）				
	通勤定期	通学定期	定期外	合計	前年比(%)
昭50	241	142	248	631	
昭60	168	74	233	475	75%
平１	148	84	217	449	95%
平10	117	75	207	399	89%
平15	94	56	168	318	80%
平20	89	48	129	266	84%
平22	91	46	118	255	96%
平23	92	45	115	252	99%
平24	94	46	123	263	104%
平25	104	50	130	284	108%
平26	98	46	124	268	94%
平27	102	40	129	271	101%
※平28	69	31	140	240	89%
平29	71	28	140	239	100%
平30	73	27	139	239	100%
令1	71	27	142	240	100%
令2	66	20	102	188	78%
※令3	61	19	87	167	89%

※平成28年度の輸送人員減少は，ICカードシステム導入に伴うカウント方法の変更によるもの。
※令和３年度の数値は４月～３月の実績のため，誤差がある。

（図１）福島交通飯坂線の概況について

子どもたちは，前年比で比較した際に，令和２年度からの大幅な利用者の減少は，新型コロナウィルス感染拡大に伴う一時的な利用者の減少であると予測した。しかし，輸送人員の合計に着目すると，平成27年度あたりから減少傾向が始まっていることに気付き，問題はより長期的で根本的な部分にあると考えた。飯坂電車は福島北郊の温泉地である飯坂温泉への移動手段として開業した歴史的背景を伝えると，子どもたちは終着点である飯坂温泉の利用者の減少が背景にあるのではないかと予想し，より詳細な調査に乗り出すこととなった。

調査の趣旨を飯坂観光協会に伝え，調査に協力してくれる店舗を募っていただいた。すると様々な業種の店舗から快諾を得ることが出来た。今回はその中から，

（図２）飯坂温泉街を調査する子どもたち

飲食店や宿泊施設，観光施設に調査対象を限定して活動を進めることとした。複数回校外学習で調査に訪れたが，平日のため人はまばらであった。子どもたちは，休日や連休の温泉街の様子を見ないと，賑わいがないのか判断できないと考え，休日に興味のある商店を訪ねたり，夏休みを利用して実際に宿泊した温泉旅館の女将さんにインタビューするなどしたりして，３ヶ月をかけて実態を調査した。このように繰り返し飯坂温泉街の方と関わることを通して，コロナ禍による観光客の減少や，家族連れをもっと呼び込みたいという地域の声を知り「飯坂温泉街をより活性化させるために自分たちにできることは何か」という年間を通した協働テーマを見いだすことが出来た。

２－２　協同的な学びと個の学びの一体化

「飯坂温泉街をより活性化させるために自分たちにできることは何か」という協働テーマに向けて，解決方法を考えた。子どもたちはICT機器を駆使したり，休日の調査で得た情報を共有したりしながら個別に解決方法を考えた。子どもたちから出された多種多様なアイディアを子どもたち自身が分類した結果，大まかに以下の四つのテーマを基に活性化を図りたいとする考えに収束していった。

- 他よりも高温で湯冷めしにくい温泉のよさ
- 飯坂の食べ物の美味しさ
- 古くからの街並みや観光地としての魅力
- 家族連れを呼び込むためのイベント企画

テーマごとに自分たちの考える飯坂を盛り上げるプランを提案し合った。その中で以下のような話し合いがなされた。

Ｃ１　飯坂温泉を盛り上げるのだから，温泉のよさを伝えることは絶対に必要だよ。
Ｃ２　確かに食べ物は魅力的だけど，ご飯を食べて終わりでは，観光客が増えたとは言えないよ。
Ｃ３　「行ってみたい」と思ってもらうことも大切だけど「もう一回行きたい」と思ってもらえることも，長く盛り上げることに繋がるよね。

Ｃ４　一回来て終わりではなく，何回も飯坂に来て，たくさんの魅力を味わってもらうようなイベントを企画できないかな。
Ｃ５　温泉に入ったりご飯を食べたりするミッションが設定されていて，それを達成していく内容なら，子どもは楽しいよね。
Ｃ６　スタンプラリーにして，スタンプをたくさん集めれば割引券がもらえるようにすれば，また行きたいと思ってもらえるのではないかな。
Ｃ７　調査に協力してくれたお店をミッションに組み込めば，恩返しにもなるね。でも本当に飯坂の人たちはやって欲しいと思ってくれるかな。

この話し合いをきっかけに，子どもたちの目的意識は「観光客を増やしたい」という漠然としたものから「家族連れが繰り返し行きたくなるようなイベントを企画したい」という，相手や目的をより具体的にイメージしたものへと深化を遂げた。温泉や食，観光地を巡るといった飯坂の多様な魅力を，一回でなく複数回訪れる中で，家族でじっくり味わってほしいという願いを叶えるために，子どもたちは「スタンプラリー」を企画することで考えが一致した。

２－３　実施に向けた次なる課題

自分たちの計画が本当に飯坂温泉街にとって価値のあるものなのか確かめるために，飯坂観光協会の方へ自分たちの構想の概要を伝えると，出来る限りの協力をして頂けることとなった。それと同時に，実現に向けて，率直に以下のような意見を頂くことが出来た。

・　高齢の方が営業する商店もあり，ルールが複雑だと協力出来ない可能性がある
・　割引券を景品にすると使用されたお店の負担になってしまうため別の景品が好ましい

（図３）観光協会の方と議論する子どもたち

友だちだけでなく，地域の方と協働的に解決方法を考える中で，自分たちのアイディアが飯坂にとって価値があるものだと確認することが出来た。また，新たな課題を見いだし，その解決に向けて動き出した。この時点で11月だったため，年度内の実施に向けて，次のように課題を分類した。この中から個人の興味のある課題を選択し，同時進行で解決方法を模索することとなった。

・　参加してくれるお店や旅館にとって，価値のあるミッション内容の検討
・　実施に向けて必要な準備物の構想
・　実現可能な景品の検討
・　自分たちの活動の宣伝方法

課題選択型としたことで，多少人数に偏りは見られたが，自分が解決したい課題と向き合うことで，グループ内では活発な議論が交わされた。その中で，ミッションの内容は各商店の「思い」を再度調査する必要があると気付き，子どもたちの方から再調査のための校外学習を提案してきた。当初の年間計画に予定はなかったが，すぐに各商店及び旅館等に連絡を取り，日程を調整し，校外学習を設定した。今回は活動場所が多岐にわたるため，保護者ボランティアも要請し，子どもたちの安全を確保しながら，活動にあたった。繰り返し同じ商店に関わってきたため，この頃になると飯坂の方とも顔馴染みになり，お土産を頂いたり励ましの言葉をかけて頂いたりと，深い関係を築くことが出来た。このような交流の積み重ねが「お店に恩返しをしたい」と，子どもたちがよりよい活動にしようと粘り強く活動し続ける原動力に繋がったと考える。

（図４）繰り返し関わり続ける子どもたち

２－４　プレゼンテーション

各商店の思いやこだわりに沿ったミッションを考え，景品も飯坂温泉の公式マスコットキャラクターである「ゆげお」の使用許可を得て，オリジナルシールを作成することとなった。宣伝方法も福島駅でのチラシ配布や，ポスターでの宣伝を計画した。前回ご指摘頂いた課題を解決し，具体的な開催期間や方法を学習支援アプリ上で資料にまとめた。

後日改めて飯坂観光協会の方と，参加してくれる商店の方々を招待し，自分たちが考えた「がんばれ飯坂！元気もりもりスタンプラリー」の詳細な計画案を，

プレゼンテーションした。その場でミッション内容の微調整や，デザインの面でアドバイスを頂き，年明けの３月から実施することで観光協会の方々から了解を得ることができた。

また，使用するスタンプについては，子どもたちが考えたデザインを，観光協会が費用を負担し，作成することとなった。このように，地域の方々と協働しながら，子どもたちの思いが形となっていった。

（図５）自分たちの構想をプレゼンテーションする様子

（図６）プレゼン後に，その場で改善点を聞く子どもたち

２－５　街頭での宣伝活動

スタンプ本体やスタンプカード，宣伝用のチラシやポスター，さらには景品のシール等，作成物は多岐にわたったが，子どもたちは冬季休業期間を利用して考えたデザインを持ち寄り，互いのアイディアを組み合わせながら作成を進めた。こちらもICT機器を活用し，それぞれの用意したイラスト，地図，テキスト等をレイアウトや配色を考えながら全て子どもたちがデザインした。

スタンプラリー開催直線に，子どもたちは福島駅で活動を宣伝するチームと，飯坂温泉街で協力してくれる商店にスタンプ等の物品を届けながら最後の協力依頼をするチームとに分かれ，保護者ボランティアの力を借りながら校外学習に臨んだ。宣伝チームは，活動をPRするチラシを手に，道行く人に声をかけて，一人ひとり活動内容を伝えた。始めは緊張からか，自分から声をかけられない姿も多く見られた。しかし，観光協会のご厚意により，子どもたちに内緒で公式マスコットキャラクターの「ゆげお」が応援に駆けつけてくれた。これをきっかけに，子どもたちは勇気を出して自分から声をかけ，配布活動に取り組み始めた。時間がないと断られることもあったが，子どもたちは観光協会の方々の思いに応えようと，粘り強く声をかけ続け，多くの子が予定していたチラシを配りきった。帰校後すぐに観光協会から，さっそくチラシを持ったスタンプラリーへ参加したいという地域住民の方が複数名訪れたとの連絡を頂いた。子どもたちは宣伝の効果を実感することが出来た。

（図７）子どもたちが作成したスタンプカード

（図７）子どもたちが作成したスタンプカード

（図９）飯坂電車の駅にポスター貼付を依頼

(図10) 公式マスコットキャラクター「ゆげお」のサプライズ登場に沸く子どもたち

しかし，学校に戻って振り返りの中で以下のような意見が上がった。

> Ｃ１　配るのに精一杯で，家族連れを意識して声をかけられなかったな。
> Ｃ２　家族連れを増やすためにも，附属小学校のみんなにも宣伝したほうがいいよ。

子どもたちは，安易に活動に満足せず，自分たちの目的に立ち返り，冷静に活動を振り返っていた。そこで，次は校内発信に向けて子どもたちは動き出した。

２－６　校内に向けての宣伝活動

各学級の朝の会の時間を利用して，校内の全クラス，また，先生方にも宣伝のチラシを配布した。給食の時間には，スタンプラリーの概要を，１年生から６年生に分かるように放送で伝える活動も行った。このような宣伝が実を結び，他学年で実際に参加したことを作文に書いてくれた子どもがいたため，参加してみての感想や，楽しかったところをインタビューする様子を，また給食の時間に放送した。放送後に，児童昇降口にスタンプカードを設置したところ，150枚あったスタンプカードが一日で底をついた。

（左図11）朝の会に，他学年へチラシを配付した
（右図12）詳しい内容は校内放送で，全校に発信した

３　社会に開かれた教育課程づくり

スタンプラリーの開催期間中，スタンプラリーの台紙の減り具合と，実際に何人の方が参加したかを観光協会の方々が，次のように詳細に記録を取っていてくださった。

また，地域の新聞や，飯坂温泉の公式SNS，観光情報サイトでも大きく取り上げて頂けたことも，多くの人に活動を知ってもらうきっかけとなった。

最終的な参加者は延べ621人となった。そのうち，実際にミッションを３カ所以上クリアし，景品を獲得した参加者が288名。参加者全体の約半数が，３カ所以上観光地を巡っていたという結果であった。また，全てのミッションをクリアした参加者は５名いた。開催期間が約２ヶ月という短い期間ではあったが，はっきりと観光客が増加していることが分かる。この結果から，自分たちの考えたオリジナルのスタンプラリーを通して，飯坂温泉街をより活性化させるという子どもたちの願いが現実のものとなったと考える。

日付		ラリー来所者	ミッションクリア数	3ヵ所	6ヵ所	9ヵ所
2月8日	水	1	0			
2月9日	木	1	0			
2月10日	金	0	0			
2月11日	土	8	11	6	5	
2月12日	日	80	26			
2月13日	月	2				
2月14日	火	1	1			
2月15日	水	1	0			
2月16日	木	2	0			
2月17日	金	3	0			
2月18日	土	27	7	2	5	
2月19日	日	0	0			
2月20日	月	0	0			
2月21日	火	2	2	2		
2月22日	水	1	0			
2月23日	木	57	22	17	4	1
2月24日	金	2	2	2		
2月25日	土	22	4	3	1	
2月26日	日	14	5	2	2	1
2月27日	月	0	0			
2月28日	火	4	0			
3月1日	水	0	0			
3月2日	木	2	0			
3月3日	金	2	1	1		
3月4日	土	25	12			
3月5日	日	42	13			
3月6日	月	3				
3月7日	火	0	0			
3月8日	水	0	0			
3月9日	木	1	1			
3月10日	金	0	0			
3月11日	土	9	5			
3月12日	日	34	13			
3月13日	月	0	0			
3月14日	火	6	5	3	2	
3月15日	水	3	3	2	1	
3月16日	木	2	1	1		
3月17日	金	23	11	11		
3月18日	土	0	0			
3月19日	日	49	3			
3月20日	月	8	0			
3月21日	火	27	7			
3月22日	水	17	8			
3月23日	木	6	4			
3月24日	金	1	0			
3月25日	土	15	12			
3月26日	日	0	0			
3月27日	月	7	7			
3月28日	火	9	5	5		
3月29日	水	0	0			
3月30日	木	25	13	13		
3月31日	金	14	6	6		
4月1日	土	23	12	9	3	
4月2日	日	18	19	18	1	
4月3日	月	10	5	5		
4月4日	火	5	4	3	1	
4月5日	水	7	7	1	6	
合計		621	288	208	75	5

開催後，初めての週末に90人近い参加者が訪れている。

２月27日に校内発信を実施。直後の週末に，参加者の数が大きく増加している。

学校が春休みに入ると，平日の参加者が増加していることから，附属小からの参加者が一定数いたことがうかがえる。

（図13）観光協会がまとめた延べ参加者数

地域課題に対し，切実感をもち，年間を通して向き合ったことで，地域の方々と協働しながら，持続可能な社会の作り手として必要な資質・能力を身に付けることが出来たのではないだろうか。社会に開かれた教育課程の実現に迫れたと考える。

４　成果と課題

本実践の成果として，協働的な学びの充実があげられる。年間を通して探究する協働テーマを設定することにより，個人では思いつかなかった解決方法や新たな課題に気付くことが出来た。１年間の中で子どもたちは何度も集団としてのPDCAサイクルを回し，自分たちの活動をよりよいものにしようと協働的に学ぶことが出来た。また，友だちだけでなく，地域の「ヒト」「モノ」「コト」とも繰り返し関わることで，実際の地域課題を解決するという貴重な経験を積むことが出来た。友だちや観光協会，商店街の人々といった多様な他者と関わりながら，よりよい課題解決を目指す協同的な学びに取り組むことが出来た。未知なる課題に対し，多種多様な人々と協働しながらよりよい解決方法考え，一人ひとりが未知の課題に対し，自身の経験や知識を生かして主体的に解決しようとする態度を養う上で，非常に効果的であったと考える。また，社会に開かれた教育課程を編制する上でも，実際の地域課題を取り上げることは有意義であったと考える。今後は協働的な学びの中で埋没している個がいなかったかを分析し，よりよい協働的な学びへと繋げていきたい。

その一方で，個別最適な学びについては課題が残った。解決方法を考える際は，基本的に個に委ねていたが，多くの場合が課題選択型で，選択した課題の中で少人数よる協働的な学びは発生していたが，個人単位で課題を見いだし，解決するには至らなかった。同様に指導の個別化という観点で見ても，教師の問い返しや事象提示といった働きかけは，多くの場合一斉指導の場面で集団に向けて行われており，個人の学び方や課題に最適化されたものではなかった。個人の課題意識に基づく情報収集と，収集した情報を持ち寄り，より飯坂温泉全体を活性化させたいという集団の課題意識の両方を解決することが出来るようにし「協同的な学び」と「個別最適な学び」とが一体となって充実していくことをねらいとしたが，協働の時間が長く，個人レベルで課題を見いだし，解決方法を考える力を育むには至らなかった。

今後は，協同的に課題解決を図る大きなテーマの基に，個人としてどう関わっていくのかを自己決定させ，互いに関わり合いながらよりよい解決を目指す探究的な学びの充実を目指していきたい。大きなテーマに収束していくカリキュラムとすることで，子どもたちは個で解決を目指しながらも，他者の課題への関わり方を学んだり，時には協働して解決方法を検討したりしながら，学びを進めることが出来る。このように集団と個の学びを往還し，自己調整しながら学ぶことが，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る上で重要であると考える。

５　終わりに

今後も「総合的な学習の時間」のみならず，学校教育目標具現のためのカリキュラム・マネジメントに取り組むことで，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指し，研鑽を深めていきたい。

【謝辞】

本実践をまとめるにあたって，飯坂温泉観光協会や，各商店及び旅館の方々，福島交通の皆様には，多大なるご支援を頂きました。この場を借りてあらためて感謝申し上げます。

注・引用文献

奈須正裕　2022 「個別最適な学びの足場を組む。」 教育開発研究所

奈須正裕　2021　個別最適な学びと協働的な学び　東洋館出版社